

令和 3 年 5 月 27 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2020

課題番号：15K01911

研究課題名(和文) 戦後日本の軍事組織の男性と「軍事的男性性」

研究課題名(英文) Men and "Military Masculinities" in the Postwar Japanese Self-Defense Forces

研究代表者

佐藤 文香 (SATO, Fumika)

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：10367667

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、軍事組織のジェンダー研究として、男性自衛官たちの経験を、戦後日本社会における自衛隊の位置づけの変化の中に位置づけて分析したものである。文献調査を用いて、日本社会における自衛隊の受容と定着の過程をおさえた上で、インタビュー調査を用いて、世代の異なる現職・退職男性自衛官たちの経験とアイデンティティの様態を、ジェンダーの視角から考察した。あわせて、英語圏において蓄積されてきた先行研究の中から、特に「軍事的男性性」概念を用いた文献を調査、レビューし、この概念の有用性と陥穽についての考察を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

軍隊の社会学的研究は、英語圏において分厚い蓄積があるが、日本の自衛隊の社会学的研究はまだまだ不十分な状態にある。ジェンダー研究としては従来、女性軍人の経験に向けられてきた焦点が、2000年頃から男性軍人に向け直されるようになってきた。軍隊の任務が多様化し、平和と安全保障分野のジェンダー主流化が進むなかで、「兵士の男性性」の揺らぎを考察する研究は急務である。本研究はこの分野に日本の自衛隊の男性たちの事例をもって貢献し、自衛隊研究を日本特殊性論に囲いこむことなく、国際的な研究動向へと接続させることができた。

研究成果の概要(英文)：This research analyzes the experiences of male Self-Defense Forces (SDF) officers in the context of the SDF's changing position in postwar Japan. Via literature review, I explored the processes involved in the acceptance and establishment of the SDF in Japanese society. I then conducted interviews to examine the experiences and identities of current and retired male SDF officers of different generations, from a gender perspective. Furthermore, I surveyed research published in English language journals using the concept of "military masculinity", and discussed the advantages as well as disadvantages of utilizing this concept.

研究分野：ジェンダー研究

キーワード：軍事的男性性 ジェンダー 自衛隊 軍事組織 戦後日本社会

1. 研究開始当初の背景

軍隊の社会学的研究は英語圏において多大な蓄積がある。1960年代にアメリカで台頭した軍事社会学は、軍事組織の内部分析と、軍隊と社会の関係の外部分析を二大柱としてきた。1974年に創刊された Inter-University Seminar on Armed Forces and Society のジャーナル *Armed Forces and Society* はこの分野を牽引し、軍事制度や軍民関係の分析に成果をあげてきた。

軍隊のジェンダー研究は、アメリカで徴兵制が志願制に切りかわった 1970年代にはじまる。もともと軍事社会学は、第二次世界大戦時に米軍が徴集兵の戦線離脱と軍隊の機能不全を防止しようというきわめて実践(戦)的な関心からスタートしたこともあり、批判的なアプローチを旨とするジェンダー研究は軍事領域の研究に二の足をふみがちだった。早くから軍隊の女性に着目してきた軍事社会学者の Mady Wechsler Segal は *Handbook of the Sociology of Gender* において、フェミニストの反軍的立場と軍事組織の知識の欠如がこの分野の研究の遅れをもたらしたと述べている(Kluwer Academic/Plenum Publishers, 1999)。

結局、湾岸戦争以降の女性兵士の可視性の高まりという現実におされる形で、軍隊のジェンダー研究は本格的な展開を見せることになる。2003年刊行の *Handbook of the Sociology of the Military* (Kluwer Academic/Plenum Publishers)には「軍隊の女性」に一章が割かれており、軍隊が女性に門戸を開く理由、女性の軍隊参入の様態と軍事専門職への志向性、女性軍人が直面する問題や平和・人道的任務における機会の拡大等についての実証研究の成果がまとめられている。また、2006年には International Sociological Association の「軍隊と紛争解決研究委員会(RC01)」が「軍隊の女性」セッションを開催し、その報告は *Women in the Military and in Armed Conflict* (Vs Verlag für Sozialwissenschaften, 2008)として発表された。

一方、1987年に International Studies Association の年次大会でジェンダー・アプローチに関心のある研究者が会合を開いたのを皮切りに、フェミニストによる国際関係論へのジェンダーの視座の導入もはじまった。1990年には「フェミニスト理論とジェンダー研究(FTGS)」分科会が設立、1999年には *International Feminist Journal of Politics* が創刊され、「テロとの戦い」におけるジェンダー化された表象の分析や安全保障の再概念化、民族浄化やジェノサイドの女性加害者や民間化される軍隊とジェンダーの問題など、新たな研究の領野が世界各国の研究者によって切りひらかれている。こうした批判的視座からの研究は学際的な広がりをもちはじめ、2015年に創刊された *Critical Military Sociology* では、軍隊の制度や実践のみならず、ひろく軍事主義や軍事化の批判的研究が活動家にも開かれた形で呼びかけられているところである。

以上のように国際的な研究が進むなか、本研究の開始当初、日本の自衛隊研究はいまだ不十分な状態にあった。先述の *Handbook of the Sociology of the Military* は、軍事社会学の展開がほぼみられない地域として、日本、中国、アジア・北アフリカのイスラム諸国、サハラ以南のアフリカ諸国をあげ、これを軍隊研究の自由度の低さと関連付けている。研究対象へのアクセスの難しさもさることながら、日本の場合には戦後の軍事的なものへの忌避的傾向もかかわっていたと言えよう。

もちろん、自衛隊や防衛政策の歴史研究、政軍関係や文民統制の政治学研究、あるいは自衛隊の運用・実務に関する実践的研究はあるが、社会学的な実証研究としては、河野仁による「自衛隊 PKO の社会学」(『戦後日本のなかの「戦争」』世界思想社、2004)、Sabine Frühstück による「不安な兵士」たる自衛官の研究(*Uneasy Warriors*, University of California Press, 2007)、そして研究代表者による『軍事組織とジェンダー』(慶應義塾大学出版会、2004)と、わずかであった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、戦後の日本における軍事組織の社会的位置の変容の中で、男性自衛官の経験を把握し、これをジェンダーの視座から分析することである。

研究代表者は、既に、自衛隊の女性の経験に焦点をあて、いっけん既存のジェンダー秩序への反逆者のように見える彼女たちが、軍事組織の支配的な考えにそう形で組織に順応してゆく過程を明らかにした。しかし、自衛隊の女性比率は 5.6%に過ぎず、圧倒的多数が男性で構成されている点、そして上記のような女性の順応が男性構成員との相互作用に多分に影響されている点から、男性に分析の射程を広げることが研究を深化させる上で不可欠だと考えるにいたった。

軍事組織のジェンダー研究としてまっぴら女性軍人の経験に向けられてきた注目を、男性軍人に向け直すことによってジェンダー化された軍事組織の性質をより深く理解することを目指す新たな動向は、英語圏においても 2000年代に入ってから目をひくようになっていく。R. Connell の男性性理論に強い影響を受けた社会学者 Paul R. Higate の *Military Masculinities* (Praeger, 2003) はその出発点に位置づけられる。この論文集では、軍事的男性性がそれ自体脆

い構築物であること、その構築が女性との差異化に依拠していること、しかしながら軍事的男性性とは戦士のステレオタイプよりもずっと複雑であり複数形で示されるべきものであること、軍隊内外の男性性の間に連続性があり二項対立で把握することは不可能であること等が明らかにされている。

研究代表者はこうした先行研究の蓄積をふまえ、多数のレビューや解説論文にまとめてきたが、アジアからの発信が総じて弱いことを痛感するようになった。本研究は、この欠落部をうめるべく、史資料の発掘とインタビュー調査に基づき、自衛隊に所属した男性たちの経験を時代的文脈の中で把握し、地域や世代による多様性に留意しつつ、これをジェンダーの視座から分析していくことを目指した。

軍隊の任務が多様化し、平和と安全保障分野のジェンダー主流化が進むというグローバルな展開のなかで、兵士の男性性の分析は急務である。2014年の集団的自衛権の行使容認をはじめとして、自衛隊が「闘わない軍隊から闘う軍隊へ」と大きな転換点をむかえつつある中で、自衛隊研究を日本特殊性論に囲いこむことなく、国際的な研究動向へと接続させてゆくことが求められている。2000年に国連では平和と安全保障分野のジェンダー主流化を求める安保理決議1325号が採択され、日本もその国別行動計画を2016年の第一次計画、2019年の第二次計画として策定した。こうした変化の中にある男性自衛官のアイデンティティの変容を探ることで、本研究は、学術のみならず政策においても有意義な視座を提供することを目指した。

3. 研究の方法

研究方法としては、文献調査とインタビュー調査を用いた。

文献調査としては、公式文献や記念誌等の基礎資料および自衛隊についての文献の読解を行うことで、戦後の自衛隊をとりまく日本社会の変化の把握に努めた。

公式文献としては『日本の防衛 防衛白書』をはじめ、自衛隊員を読者とする週刊の新聞『朝雲』、広報誌『防衛アンテナ』『Securitarian』『MAMOR』、『自衛隊十年史』、『防衛庁五十年史』等の記念誌を、基礎資料として用いた。また、男性自衛官の経験の把握のために、防衛研究所戦史部によるオーラル・ヒストリーをはじめ、既刊のインタビューや取材記録、元自衛官による回顧録等の文献を可能な限り収集した。

さらに、先行研究として、「軍事的男性性」を分析概念として使用した研究を重点的にレビューした。具体的には、International Studies Associationの発行する6つのジャーナルのほか、*Men and Masculinities*、*International Feminist Journal of Politics*、*Critical Military Sociology*等に掲載されている論文を中心に可能な限り網羅的におさえ、「軍事的男性性」概念を理論枠組みとして用いることの功罪について検討をおこなった。

インタビュー調査は、世代の異なる現役・退役男性幹部自衛官36名に対し、一人あたり90-120分実施した。インタビューでは、入隊当時の本人・家族・地域における自衛隊に対する認識、組織での任務を通じた経験と認識の変化、自衛官になることで得られたもの・失ったものについての評価を中心に、半構造化方式で行った。調査は機縁法を用い、30-60代の各世代が陸海空自衛官最低2名以上含まれるように設計している。

これらの文献調査・インタビュー調査結果をふまえた上で、男性幹部自衛官たちの経験とアイデンティティについて、時代・世代の差異に注意しながら、ジェンダーの視座により分析・考察を行った。

4. 研究成果

(1)初年度である2015年度は、文献研究として、公式文献や記念誌等の基礎資料や自衛隊史を読みこむことで、戦後の自衛隊をとりまく日本社会の変化の把握につとめた。また、英文ジャーナルを中心に「軍事的男性性」を分析概念とした研究のサーベイを行い、理論枠組みを精緻化していくための予備的作業を行った。特に、Mary Louise Roberts, *What Soldiers Do: Sex and the American GI in World War II France*(Chicago University Press, 2013)については、監訳者として『兵士とセックス 第二次世界大戦下のフランスで米兵は何をしたのか?』(明石書店, 2015年)を刊行し、『女性情報』や立命館大学におけるシンポジウム「戦争と性暴力の比較史へ向けて」での報告を通じて広く紹介した。

調査としては、現職・退職男性自衛官への聞きとりを重ね、変容する日本社会の文脈において異なる世代の彼らが自衛隊という軍事組織でどのような経験を有し、それをどのように受け止めているのかを把握することにつとめた。

また、国際ジェンダー学会シンポジウム「『女性活用』と女性の動員」の企画・運営を行い、軍事領域を含めた日本の女性活用の状況について考察を深め、International Studies Associationの年次大会への参加を通じて、「軍事的男性性」概念を用いた軍事領域のジェンダ

一研究を遂行している各国の研究者との意見交換を行った。

これらの成果は、教科書『ジェンダーで学ぶ社会学』の担当章に反映させると共に、共著論文「国際平和活動におけるジェンダー主流化」として『国際ジェンダー学会誌』に掲載し、ジェンダー史学会シンポジウムでの報告「軍事化される『平等』と『多様性』」にも活かすことができた。

(2)二年目にあたる2016年度は引き続き、文献研究として、公式文献や記念誌等の基礎資料および自衛隊史の先行研究を重点的に読みこむことで、戦後の自衛隊をとりまく日本社会の変化の把握につとめた。また、International Studies Associationの発行する6つのジャーナルのほか、*Men and Masculinities*、*International Feminist Journal of Politics*、*Critical Military Sociology*等の英文ジャーナルを中心に「軍事的男性性」を分析概念とした研究サーベイを網羅的におこない、理論枠組みを精緻化していくための予備的作業をおこなった。

調査としては、現職・退職男性自衛官への聞きとりを重ねる一方で、比較対象とするために現職・退職女性自衛官の聞きとりもおこない、変容する日本社会の文脈において、異なる世代の彼ら・彼女らが軍事組織でどのような経験を有し、それをどのように受け止めているのかを把握することにつとめた。

これらの成果は、ジェンダー史学会の『ジェンダー史学』に論文「軍事化される『平等』と『多様性』」として掲載するとともに、日本オーラル・ヒストリー学会大会のシンポジウム「日本軍『慰安婦』問題とオーラル・ヒストリー研究の／への挑戦」におけるコメンテーターとしての報告に活かすことができた。また、一般紙における取材を3件受けそのコメントに活かすとともに『女たちの21世紀』への寄稿「軍事化に取り込まれる『女性活躍』」などを通じて、広く紹介することにつとめた。

(3)三年目にあたる2017年度は、これまで聞きとり調査を続けてきた現職・退職男性自衛官のトランスクリプトを集中的に読みこみ、世代の異なる男性自衛官たちのアイデンティティ構築過程に注目することで、彼らの軍事組織での経験を把握することにつとめた。分析に際しては、先行研究において指摘されてきた組織内外の他者双方に注意を払い、彼らが「男性自衛官である」というアイデンティティをつくりあげる際にいかなる他者との差異化をおこなっているのかを明らかにした。

あわせて、文献研究として、公式文献や記念誌等の基礎資料の収集を続け、先行研究の読みこみを続けた。特に、英語圏の研究における「軍事的男性性」概念の使用方法に対し、近年、批判的軍事研究において、いかなる批判がなされているのかをおさえるため、*Critical Military Studies*における論文を集中的におさえ、自身の理論枠組みのための予備的作業をおこなった。

これらの成果は、国際ジェンダー学会大会において「『戦わぬ軍事組織』における男性性の構築」、Association for Asian Studies (AAS) 年次大会において“The ‘Benevolent’ Japan Self Defense Forces and Their Utilization of Women」として報告をおこなった。また、ウィメンズアクションネットワーク(WAN)主催のシンポジウムにパネリストとして登壇し、「銃後からフロントへ 女性活躍時代の自衛隊」の報告にも一部研究の成果を活かすことができた。また、過去2年の間に登壇した二つのシンポジウムにおける報告をベースに、論文「戦争と性暴力 語りの正統性をめぐって」を執筆し、『戦争と性暴力の比較史へ向けて』として刊行した。

(4)四年目にあたる2018年度は、これまで聞きとり調査を続けてきた現職・退職男性自衛官のトランスクリプトをもとに、世代の異なる男性自衛官たちの経験を把握することに努めた。分析に際しては、彼らが語りの中で、組織内外のいかなる「他者」と自己とを差異化しようとしているのかに着目し、男性自衛官のアイデンティティ形成のプロセスの一端を明らかにした。

あわせて、文献研究として、公式文献や記念誌等の基礎資料の収集、および、先行研究の読みこみを続けた。また、これまでに収集してきた英語圏の先行研究を検討した結果、「軍事的男性性」概念の使用をめぐって、現在大きく2方向の研究潮流に分岐しつつあることを指摘した。自身の理論枠組みをつくりあげていく際、この2潮流をどのように超克していくべきなのか、整理しつつ自らの指針をたてることに努めた。

これらの成果は、戦争社会学研究会大会において「『男性自衛官である』という経験 アイデンティティ構築における「他者」に注目して」、国際ジェンダー学会大会において「男性性と軍隊・戦争の関係を再考する 『軍事的男性性』概念の予備的考察に向けて」として報告を行った。また、日本政治学会のジェンダーと政治研究会による企画「安全保障とジェンダー フェミニズム・批判理論・ジェンダー主流化」では討論者をつとめ、関連領域の研究者との意見交換の機会を得た。さらに、朝日新聞社やNHK、トムソン・ロイター社の取材を受けることで、これらの知見を広く一般社会にフィードバックすることにも努めた。

(5)五年目にあたる2019年度には、これまで聞きとり調査を続けてきた現職・退職男性自衛官調査の結果を分析しつつ、補足的な追加調査を行った。彼らの経験を、特に、時代・世代と地域の差異に注目しつつ把握することに努めた。分析に際しては、自衛隊を抱える地域社会との関係性に着目し、男性自衛官たちが地域社会のなかで地元住民とどのような交流をもち、そのことが彼らの職業意識やアイデンティティ構築にどのようにかかわっているのかを明らかにした。

あわせて、文献研究として、これまでに収集してきた公式文献や記念誌等の基礎資料、および、先行研究の読解を続けた。聞きとり調査の結果については、英語圏において蓄積されてきた「軍事的男性性」概念を用いた先行研究と接続させつつ、ジェンダーの視座から彼らの経験を分析・考察し、研究の総括を行った。

予定していた国際会議の年次大会が中止されたため報告はかなわなかったが、共著の英語論文“The ‘Benevolent’ Japan Self-Defense Forces and Their Utilization of Women”が刊行された。さらに、世界思想社の『世界思想』に「女性兵士は男女平等の象徴か？」を出したほか、朝日新聞社・読売新聞社・毎日新聞社・中日／東京新聞社やウェブメディアの取材を通じて、広く研究成果を一般社会にフィードバックすることにも努めた。

(6) 新型コロナウイルス感染状況の悪化に伴う研究期間の延長による最終年度である2020年度には、本研究のこれまでの調査結果を複数の成果物としてまとめた。現職・退職男性自衛官36名に対するインタビュー調査の結果を用いて、自衛隊において圧倒的多数派を占める男性であり、かつエリートである幹部自衛官たちの経験を「自衛官であること」として、彼らのアイデンティティを「自衛官になること」として考察し、自身が編集委員を務め、2022年に刊行予定の『戦争と社会』シリーズの第二巻収録論文を完成させた。あわせて、「軍事的男性性」概念を用いた先行研究レビューの成果についても論文にまとめた。同シリーズの第一巻収録論文として、戦争を理解するにあたってジェンダーに注意を払うことが不可欠である理由を述べた論文を完成させた。また、重要な先行研究であるシンシア・エンロー氏の新著The Big Pushの翻訳を刊行し、2021年刊行予定の『男性学基本論文集』への収録論文として、キャロル・コーン、マヤ・アイクラー、ローラ・シェパード氏の各論文の監訳を行った。

さらに、Economist誌から少子高齢化社会における自衛隊の女性活用についての取材を受け、米国大使館の依頼で自衛隊の女性活躍の現状について外交官に対するレクチャーを行うなど、研究成果の幅広い還元にも努めた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 蘭信三・佐藤文香・川喜田敦子・中村理香・桜井厚・岡野八代・上野千鶴子・平井和子・山下英愛・木下直子・岡田泰平・茶園敏美・猪股祐介・樋口恵子・姫岡とし子・成田龍一	4. 巻 14
2. 論文標題 『戦争と性暴力の比較史へ向けて』刊行記念シンポジウム	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 コスモポリス	6. 最初と最後の頁 25 - 64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Fumika Sato and Nora Weinek	4. 巻 51(1)
2. 論文標題 The "Benevolent" Japan Self-Defense Forces and Their Utilization of Women	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Hitotsubashi Journal of Social Studies	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15057/30977	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 佐藤文香	4. 巻 46
2. 論文標題 女性兵士は男女平等の象徴か？	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 世界思想	6. 最初と最後の頁 62-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 ノーラ・ワイネク / 佐藤文香	4. 巻 22
2. 論文標題 沖縄で在日米軍と共に生きる 基地従業員女性の経験の両義性に注目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ジェンダー研究	6. 最初と最後の頁 93-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24567/00063537	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西成彦・古久保さくら・栗山雄佑・中川成美・井野瀬久美恵・上野千鶴子・蘭信三・平井和子・木下直子・茶園敏美・猪股祐介・姫岡とし子・佐藤文香	4. 巻 30(3)
2. 論文標題 シンポジウム『戦争と性暴力の比較史へ向けて』を読む	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立命館言語文化研究	6. 最初と最後の頁 1-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34382/00003157	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Nora Weinek and Fumika Sato	4. 巻 50(1)
2. 論文標題 Living with the US Military: The Women Working on Okinawan Bases	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Hitotsubashi Journal of Social Studies	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15057/29782	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤文香	4. 巻 14
2. 論文標題 特集「女性活用」と女性の動員 特集にあたって	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 国際ジェンダー学会誌	6. 最初と最後の頁 5-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤文香	4. 巻 12
2. 論文標題 軍事化される「平等」と「多様性」	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 ジェンダー史学	6. 最初と最後の頁 37-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11365/genderhistory.12.37	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤文香	4. 巻 86
2. 論文標題 軍事化に取り込まれる「女性活躍」	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 女たちの21世紀	6. 最初と最後の頁 22-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中林健・佐藤文香	4. 巻 13
2. 論文標題 国際平和活動におけるジェンダー主流化 軍のジェンダー・アドバイザーの機能に焦点を当てて	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 国際ジェンダー学会誌	6. 最初と最後の頁 79-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 佐藤文香
2. 発表標題 「不安な兵士」のアイデンティティ構築 自衛隊と地域社会
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤文香
2. 発表標題 ジェンダーと政治研究会 企画 安全保障とジェンダー フェミニズム・批判理論・ジェンダー主流化 コメント
3. 学会等名 日本政治学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤文香
2. 発表標題 男性性と軍隊・戦争の関係を再考する 「軍事的男性性」概念の予備的考察に向けて
3. 学会等名 国際ジェンダー学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤文香
2. 発表標題 「男性自衛官である」という経験 アイデンティティ構築における「他者」に注目して
3. 学会等名 戦争社会学研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Fumika Sato, Nora Weinek
2. 発表標題 The "Benevolent" Japan Self Defense Forces and Their Utilization of Women
3. 学会等名 Association for Asian Studies (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤文香
2. 発表標題 銃後からフロントへ 女性活躍時代の自衛隊
3. 学会等名 ウィメンズアクションネットワークシンポジウム「こうして戦争は始まる 孫世代が会う『銃後の女たち』」(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 佐藤文香
2. 発表標題 「戦わぬ軍事組織」における男性性の構築 男性自衛官のライフストーリーから
3. 学会等名 国際ジェンダー学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 佐藤文香
2. 発表標題 日本軍『慰安婦』問題とオーラル・ヒストリー研究のノへの挑戦 コメント
3. 学会等名 第14回日本オーラル・ヒストリー学会大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 佐藤文香
2. 発表標題 兵士とセックス 普遍性と特殊性
3. 学会等名 シンポジウム「戦争と性暴力の比較史へ向けて 強姦、売買春から恋愛まで」(招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 佐藤文香
2. 発表標題 軍事化される「平等」と「多様性」 日米の軍隊を中心に
3. 学会等名 第12回ジェンダー史学会年次大会(招待講演)
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 上野千鶴子、山下英愛、木下直子、岡田泰平、平井和子、茶園敏美、猪股祐介、樋口恵子、姫岡とし子、成田龍一、蘭信三、佐藤文香、徐在吉訳	4. 発行年 2020年
2. 出版社 語文社	5. 総ページ数 456 (387-415)
3. 書名 戦争と性暴力の比較史へ 隠された被害者を語る：第11章「戦争と性暴力 語りの正統性をめぐって」 (佐藤文香)	

1. 著者名 シンシア・エンロー、佐藤文香監訳	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 246
3. 書名 <家父長制>は無敵じゃない 日常からさぐるフェミニストの国際政治	

1. 著者名 佐藤文香、高木彰彦、岩下明裕、山崎孝史、古川浩司、香川雄一、川久保文紀、北川眞也、野間晴雄、山野正彦	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 888 (492-493)
3. 書名 現代地政学事典：戦争と性暴力 (佐藤文香)	

1. 著者名 上野千鶴子、山下英愛、木下直子、岡田泰平、平井和子、茶園敏美、猪股祐介、樋口恵子、姫岡とし子、成田龍一、蘭信三、佐藤文香	4. 発行年 2018年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 384 (315-340)
3. 書名 戦争と性暴力の比較史へ向けて：第11章「戦争と性暴力 語りの正統性をめぐって」(佐藤文香)	

1. 著者名 伊藤公雄、藤田由美子、木村涼子、中村桃子、牟田和恵、阿部真大、大槻奈巳、藤田嘉代子、久保田裕之、辻泉、小柳しげ子、谷本奈穂、辻大介、佐藤文香、上野加代子、斎藤真緒	4. 発行年 2015年
2. 出版社 世界思想社	5. 総ページ数 253 (204-217)
3. 書名 ジェンダーで学ぶ社会学 全訂新版：第13章「闘う 戦争・軍隊とフェミニズム」(佐藤文香)	

1. 著者名 メアリー・ルイーズ・ロバーツ、佐藤文香監訳、西川美樹訳	4. 発行年 2015年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 436
3. 書名 兵士とセックス	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>朝日新聞、2019年7月3日朝刊「Dear Girls 男女共同参画20年 女性自衛官」 http://digital.asahi.com/area/nara/articles/MTW20190708300740002.html?ref=comkiji_txt_end 週刊読書人ウェブ 2018年回顧 社会学 https://dokushojin.com/article.html?i=4773 週刊読書人ウェブ 2018年回顧 女性学 https://dokushojin.com/article.html?i=4767 Reuters, 2018.9.19, "Aging Japan" https://www.reuters.com/article/us-japan-ageing-military-recruits/aging-japan-military-recruiters-struggle-as-applicant-pool-dries-up-idUSKCN1LZ14S ロイター、2018年9月19日「焦点 自衛隊に迫る『静かな有事』、少子化で採用難」 https://jp.reuters.com/article/japan-selfdefenseforce-recruit-idJPKCN1LZ19X NHKくらし解説、2018年11月8日「女性自衛官 活躍広がる背景は？」 https://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/700/308859.html 書評『戦争と性暴力の比較史へ向けて』2018年4月16日 https://wan.or.jp/article/show/7817 書評『兵士とセックス 第二次世界大戦下のフランスで米兵は何をしたのか?』2015年10月11日 http://book.asahi.com/reviews/reviewer/2015101100010.html</p>
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------